

ペンテコステの説教とペンテコステ「派」の説教¹

大坂太郎

はじめに

編集委員会から執筆者に提示されたテーマは「ペンテコステ派の立場から、信仰あるいは信仰義認について考察する」であった。それを見てすぐ脳裏をよぎった問いは「上記テーマにおいてペンテコステ派と福音派の間にさほどの差異を見いだせるのか？」であり、個人的な答えは「大きな差はない」であった。勿論これは専門的な研究を経てというものというより、ペンテコステ派の教会でこの道に入り、福音派の神学校で学び、ペンテコステ派の神学校で教え、現在福音主義神学会の働きを担う一人として両派の中間点に立ち続けてきた者としての体験的な確信に過ぎない。こうした懸念を編集委員に吐露したところ、もう少し広く「ペンテコステ派の特色が描き出される論考であればよろしい」との励ましを頂いた。それを受け、改めてペンテコステ派の信仰の特色は何かと考えると、真っ先に去来したのは「聖書に書かれていることはどの時代においても変わらず起こる」という単純な確信であった。一例を挙げれば「聖書には聖霊に満たされて外国語で神の業を語ったという記事があるのだから、聖霊の満たしを受けるとき、どの時代であっても（よしそれが奇異にみえたとしても）そのようなことはいまも起こる」といった考え方である²。ペンテコステ

¹ 本論文は日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の定期刊行誌、『講壇』40号（2014年11月発刊）に掲載されたものに必要な修正を加えたものである。

² しかしこれとてもペンテコステ派特有の考え方とも言えない。むしろ福音派に広

派において聖書の記述はどの時代にも再現が可能な、開かれた神の物語なのであり、再現可能な、そして再現すべき範例なのである。

そこで本研究では「使徒の働き」の中に描かれた説教に着目し、それを範例として「ペンテコステ信仰の正しい発露としての説教」について考察する。紙面の関係もあり、その範囲を使徒の働きの前半部にあるペテロによって語られ、ルカによる編集を経た三つの説教（ペンテコステの日の説教、美しの門での説教、コルネリオ家における対話的説教）に限定し、それらを概観した上でペンテコステ派の教会が範例として掲げる初代教会の説教の特質を考察し、合わせて現在ペンテコステ派の諸教会で語られている説教が、彼らの標榜する聖書の示すその通りのものを語っているかについて批判的な考察を行いたい。

I. ペンテコステの日に語られた「説教」（使徒 2:14-42）

使徒 2:14-42 に記録されているペテロの説教（あるいは演説）は聖霊の大傾注とそれに伴う一連の尋常ではない出来事（激しい風が吹いてくるような響き、炎のような舌、他国の言葉で語るといふ現象）によって、多くの人々が弟子たちのところにあつまってきた時に語られたものである。もっともこの 28 節に書かれているものが、かの日ペテロが語ったもの全てでないことは「ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、証しをし（以下略）（2:40）」という記述によっても明白であるが、これが信頼のできる説教の要約であることは言うを俟たない³。更にこの日ペテロが語った説教は聖霊の注ぎがヨエルによって預言されたことの成就であることから始められてはいるが、その内容は決して聖霊論に限局されたものではなく、寧ろ福音の告知であり、救済への呼びかけで

範に認められ得る聖書主義（Biblicism）の先鋭化した形といっても良いように思う。聖書主義に関しては小島崇氏のブログ、「大和郷にある教会」に有益な情報が提供されている。詳しくは以下を参照のこと。

https://sugamo-seisen.blogspot.jp/2011/10/blog-post_03.html

³ I. H. マーシャル、『使徒の働き（ティンデル聖書注解）』（いのちのことば社、2005 年）83 頁

あった。

A. ヨエル 2:28-32 の引用と解釈

この説教においてペテロは自らが体験し、多くの人々が見た聖霊降臨の出来事を「酒に酔っているのだ」という低いレベルの説明に留めることがないよう、この出来事が聖書の預言に基づくものであることを述べるために、ヨエル 2:28-32 を引用している。この引用は基本的には七十人訳に基づいているが、文脈に合わせて神学的な修正が加えられている⁴。もっともこれは当時においては自然なことであった。彼らは表現を正確に書き写すことより、意味を正しく伝えるために必要な修正を優先したのである⁵。

その修正の最たるものが、ヨエル書では「その後」となっているところが「終わりの日に」と編集されていることであろう。この意図は明白である。この改変により、ペテロはこの聖霊の大傾注は神の最終的な救いのみ業の成就であり、終わりの日の始まりであることを主張したのである。このように考えるとペテロがヨエル書を引用したのは単に外国語を語るといふ現象に聖書的な根拠があるということだけを言おうとしたのではないことは明白である。もしそのようなことが眼目であったなら、引用はヨエル 2:28、29 だけで十分であったはずである。しかし実際にはペテロ（そしてルカ）は 32 節までを引用している。その理由はひとえにこのペンテコステの出来事が救済史的な意義を持っているからにほかならない。そしてそれこそがこの説教の基調音なのである。実際この説教を聞いた者は賜物として聖霊を受け「救い」を得た。ゆえに当該文脈における聖霊論が救済論との不可分の関わりを深くもっていることはこれ以上なく明らかなことである⁶。

⁴ マーシャル、84 頁

⁵ 同上。

⁶ しかしながら 1980 年代以降のペンテコステ派、特にクラシカル・ペンテコステ派（或いは第一の波）に属する聖書学者たちはこうしたルカ文書の聖霊論には救済論の結びつきがないと主張する傾向がある。その主要な唱導者には R.P. Menzies がおり、邦語でも出版されている。ウィリアム・W・メンジーズ、ロバ

B. 詩篇 16:8-11 の引用と解釈

続いてペテロはこのエポックメイキングな聖霊降臨の出来事を御子イエス・キリストの受難、死、そして復活と関連付けるのだが、受難と死については改めて語る必要はない。というのも皆がその出来事を知っているからである。だが、復活については違う。復活の事実があったということだけではなく、それが神によって計画され、聖書に記されていることであると証明しなければならない。そこでペテロが採用したのが詩篇 16:8-11 である。しかし、どうしてこの詩篇がメシアであるイエスの復活を意味していると言うことが出来るだろうか。むしろこれはダビデ自身が自らについて語っていると考えることが当然ではないかという疑問が生じるのである。この疑問に対し、ペテロはまず、ダビデ自身は既に死に、その墓が今日まで残っていることをもって答えとする。死んで墓に葬られた以上、神の聖者であるダビデは朽ち果てたとはいいようがないのである。だとすれば、この詩篇がダビデ自身のことを指しているとは言えないとペテロは確信を持って説得したのである⁷。

上記の解釈はこの詩篇を理解する上での新しい枠組みを提供している。即ちこの詩篇を将来に渡る預言として解釈するという枠組みである。だがこれは新奇なものではないようである。現にペテロが使徒 1:16 においても「聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことは、成就しなければならなかったのです」と言っていることを見ても、いくつかの詩篇が将来について語っていることは当時のユダヤ人の中では暗黙の了解事項であった⁸。つまりかの日のペテロによる聖書の解き明し、即ちこの詩をメシアに関する預言が書かれたものとする解釈は、当時のユダヤ人にとっては相応の説得性を持っていたものと考えられる。そしてこの説教者、聴衆ともに理解可能な共通の基盤に立ってペテロはこのメシア預言の成就を復活のイエスに見、それを語ったのである。

ート・P・メンジーズ、『聖霊とカーペンテコステ体験の基盤』（地引網出版、2014 年）。

⁷ マーシャル、88 頁

⁸ マーシャル、89 頁

C. 断罪と悔い改め

よく説教は「通常礼拝の中でなされる、口頭による聖書の解釈である」⁹と定義されるが、この個所におけるペテロの語りはこの定義によく合致している。しかしそれは「解釈」のプロセスを目的にするものでは決してない。ペテロの意図はむしろ、ヨエル書や詩篇をメシアなるイエスの光によって解釈することにより、聴衆に問いを与え、回答を迫ることにあった。ペテロは 36 節において、まず彼の聴衆をイエスを十字架につけた者たちだとして明白に断罪した。この断罪は功奏し、人々は心を刺され「私たちはどうしたらよいでしょうか」と使徒たちに語りかけた。対してペテロは彼らに悔い改めることと、バプテスマを受けることを強く勧めた。また先にも述べたがルカはこの日のペテロの説教を「この曲がった時代から救われなさい」という勧告によって全体のメッセージを総括していることから考えても、この日の説教の機能が勧告的なものであったことは明白である。

D. まとめ

聖霊降臨日に語られた説教、キリスト教会最初の説教は、降臨された聖霊による一連の奇怪な事象を聖書を解釈することによって明らかにすべく説き起こされるが、その中心にあったものはユダヤ人に殺されたが三日目によみがえったイエスこそが神から遣わされたメシアであり、自らの罪を悔い改めてこのイエスを信じる者は聖霊の注ぎを受けた弟子たちと同じく、賜物として聖霊を受け、この曲がった時代から救われるという、救済のメッセージであった。

⁹ 「説教」W. H. ウィリモン、R. リシャー『世界説教・説教学事典』日本基督教団出版局、1999 年、242 頁

Ⅱ. 美しの門におけるペテロの「説教」(使徒 3:12-26)

使徒 3 章において、ペテロが説教を始めるまでの経緯は、ペンテコステの日の説教と酷似している。驚異的な出来事のすぐ後で、これに驚く群衆を前にペテロは演説を行い、いましがた起こった出来事を説明している¹⁰。

A. イエスとそのみ名の力 (3:12-16)

前章における説教同様、ペテロは聴衆の様子を見、彼らの中にあった誤解、即ち「使徒たち自身が自分の力や信仰深さによって生まれつき足のなえた人を歩かせたのではないか」という誤解を解くかたちで演説をはじめている。

まず 13 節においてはイスラエルの父祖の神がイエスに栄光を与えたことが主張されている。そうであれば、イエスの名によってこのような驚くべき奇跡が為されたのは、他ならぬ神の力によるものとししか考えられないということになる。しかしイエスが神のしもべとして栄光を受けたと宣言すると、ある人は「しかし結局のところイエスは磔になって死んだではないか」と言って、この主張に同意しないことが考えられる¹¹。そこでペテロはイエスが十字架で死なれたのは今この話を聞いている「あなたがた」にその理由があるとした。

ここで興味深いのは、この説教におけるペテロのキリスト理解である。この短い語りにおいてペテロはイエスを「きよい方」、「正しい方」、さらには「いのちの君」として紹介している。まず「きよい方」であるが、マーシャルは新約における用例としてマルコ 1:24 とヨハネ 6:69 を挙げている¹²。それらは悪霊がイエスを神の聖者として認識するという文脈や (マルコ 1:24)、また弟子たちがイエスを永遠のいのちをもつ神の聖者であることを信じる告白をするという文脈において用いられている。これらのことから考えるとここにおける「きよい方」にイエスのメシア性を見ることは十分な妥当性を持っているとい

¹⁰ マーシャル、104 頁

¹¹ マーシャル、106 頁

¹² マーシャル、107 頁

えよう。次に「正しい方」であるが、これはイエスの道徳的高潔さを強調するために置かれていると考えて間違いないだろう。それは人々がイエスを十字架にかけの代わりに釈放を要求したのが「人殺し」¹³ のバラバであったということからも支持できる。更に「いのちの君」であるが、「君」と訳されているアルケゴスには「リーダー」「前導者」という意味もあるが (参：ヘブル 12:2)、ここではヘブル 2:10 のように創始者と訳するのが適訳である¹⁴。さらにアラム語においては「救い」と「いのち」は同じ言葉なので、いのちの創始者とは即ち救いの創始者であるという考え方を認めることが出来る¹⁵。このようにペテロはこれらの三つのことばによって前章において提示されたメシアであるイエスの理解を更に深めていると考えられる。

B. 断罪と悔い改め (17-21)

イエスをきよく、正しい方であり、いのちの君であると語ったペテロは同時に、聴衆であるユダヤ人たちに向かい、このイエスを殺したのはあなたがたであると断罪した。しかしこれは決して永遠の滅びをもたらすためだけに為されたものではなく、伝道的な意図をもった奨励への布石であった¹⁶。ペテロは 17 節において彼らの罪の行いは無知のゆえであったこと、続く 18 節においてはそれが神ご自身のご計画であり、神が実現したことであったことを告げ、その上で罪の赦しの為に悔い改めることと、神に立ち返ることを勧めたのである。この「悔い改め」「罪のゆるし」「神への立ち返り」は 2 章における説教と全く共通するものであるが、他方で異なるものもある。2 章においては「救い」の

¹³ バラバについては使徒の働き第一巻であるルカ 23:25 においては「暴動と人殺しのかどで、牢に入っていた」と証言されているが、マルコの並行記事 (15:7) では「暴動のとき、人殺しをした暴徒たちと一緒に牢に入っていた」、マタイ (27:16) においては「名の知れた囚人」としか記されていない。

¹⁴ F.F. Bruce, *The Book of the Act* (NICNT; Eerdmans, 1988) 82.

¹⁵ マーシャル、107 頁

¹⁶ マーシャル、108 頁